

一八八三年十二月二十六日(水)

ラーム・チャンドラ氏の別荘における聖ラーマクリシュナと信者たち

聖ラーマクリシュナは今日、ラーム・チャンドラの新しい別荘を見にいらつしやる。キリスト暦一八八三年十二月二十六日、水曜日。

ラームは、タクールを神の化身とみなして崇めている。アツァタール南神村にも頻繁に来ては、タクールにお目にかかり礼拝していく。スレンドラの別荘のそばに彼が新しい別荘をつくつたので、聖ラーマクリシュナはそれを見にいらつしやるのだ。

馬車には、マニラル・マリツクと校長のほか、一、二の信者が同乗していた。マニラルはブラフマ協会の会員である。ブラフマ協会の会員たちは、神の化身というものを認めない。

聖ラーマクリシュナ「(マニラルに向かつて)あの御方を瞑想するには、先ず制限クバデー(属性)のないものとして神を瞑想するように努力することだ。あの御方は制限が無く、言葉と心を超越している。でも、この瞑想方法で成功することはたいそう難しいがね。

あの方が人間に化身されたときは、そのときは瞑想するにもとても都合がいい。人間のなかのナーラーヤナ。肉体は覆い布で、ちょうどランタンの中に光が輝いているようなもの。ガラス箱のなかの

高価な品物を見るようなものだ」

馬車から下りて別荘に着くと、先ずタクールはラームはじめ信者たちといっしょにトゥルシーの林を見に行かれた。

トゥルシー林をご覧になると、そこに立ち止まっておっしゃる——「ワア、いいところだね。神様のことを想うのには絶好の場所だ」

次いでタクールは、大きな池の南側にある家に入ってお坐りになった。ラーム・チャンドラは、盆の上にぎくろ、オレンジ、および甘い菓子のをせて持参し、タクールにすすめた。タクールは信者たちといっしょに、大喜びで果物を召し上がった。

少したってから、庭のなかをずっと巡って歩かれた。

こんどは、近くにあるスレンドラの別荘にいらっしゃる。いくらか歩いてから馬車に乗られるおつもりらしい。馬車でスレンドラの別荘にいらっしゃるのだ。

信者たちをお供に歩いておられるとき、庭園の脇の木の根元に一人の修行者^{サードゥ}がベンチに腰掛けているのをご覧になった。すぐタクールはその修行者^{サードゥ}のそばに行かれ、彼とヒンディー語で楽しそうに話をなさった。

聖ラーマクリシュナ^{サードゥ}（修行者^{サードゥ}に向かって）あなたはどの宗派ですか？　ギリとかプリーとかの称号を持っていますか？（訳註、ギリ、プリー——共にシャンカラ派僧の階級の一つ）

修行者^{サードゥ}「人は私のことをバラマハンサと呼びます」

聖ラーマクリシュナ「それは、それは——。我はシヴァである(シヴォー・ハム)というのは結構。でも、ちよつと話がある。この創造と維持と破壊のはたらきは昼も夜もなく続いている。あの御方のシヤクティです。この根元造化力とブラフマンは不異おなじです。ブラフマンがなければシヤクティはない。水がなければ波が立たないように——。楽器がなければ弾くことはできない。

あの御方が我々をこの活動のなかに置きなされる間は、どうしても二つのものが感じられるのです。シヤクティと言うからブラフマンがある。夜という感じがあるから昼という感じもある。智ジュニヤナがあると、思アジュニヤナうから無智アジュニヤナがある。

もう一つの境地をあゝの御方は見せて下さるが、それはブラフマンは智と無智の彼方にあり、口では何とも説明できない境地です。あるものがある」

このような会話をなさつてから、聖ラーマクリシュナは馬車の方に行かれる。修行者サードもいっしょについて来る。聖ラーマクリシュナは昔からの友だちのようにこの人と腕を組んで歩いていらつしやる。

修行者サードはタクールを馬車に乗せてあげると、自分の場所に戻つて行つた。

やがて、スレンドラの別荘にタクールは入つて行かれた。信者たちと席につかされるとすぐ、先刻の修行者サードの話をなさる。

聖ラーマクリシュナ「あの修行者サードはたいしたものだ。(チームに向かつて)お前、こんど来るとき、あの人を南神村ドゥッサイネシヨルに連れて来てくれないか。

あの修行者サードは、とにかくたいしたものだよ。歌の一つにこうあるが——直ナき心なくば、神を見る

あたわず。

無形の神の信者——それも結構。あの御方は無形にも有形にもなりなさるし、そのほか何にでもね！ 永遠不変のものが変化活動するんだ。言葉と心を超越した御方が、様々の形をとって現れて仕事をしていたなさる。あのオームから、^クオーム・シヴァ^ク、^クオーム・カーリー^ク、^クオーム・クリシュナ^クが生まれた。招待する側の主人が小さい息子を使いに出した。子供はどんなに歓迎されることか。だって、然るべき人の息子が孫なんだから——」

スレンドラの別荘で飲み物を召し上がったから、やがて、聖ラーマクリシュナは南ドゥサノール神村に向けて信者ともども出発なさった。